1989年1月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 27

都市づくりのこころ

入交太二郎

都市は、フィジカルな構造物として考えられているが、都市にとって最も重要なものは〝こころ〟であり歴史や文化である。それを持たない都市は、繁栄するように見えても、いつかは限界に達する。風格と風情に富みながらかつ活力のある都市であることが求められるのである。

高知においても中央公園地下駐車場をはじめ、高知駅周辺の整備、中心市街地の再開発や自由民権記念館、龍馬記念館、あるいは美術館、歴史民俗資料館などの建設が計画され、新時代への対応が着々と進んでいるように思われる。

こうした建設が進められることは将来に希望を抱かせることではあるが、率直に言ってよそがやっていることと同じことをやっているようで、特色がはっきりしない。他市の取り組みに刺激をうけるのはいいが、高知における都市づくりは高知らしいまちづくりでなくてはならない。この基本が大切であり、これがぼやけてはいけない。

幸いにも高知には、市街の中心に高知城という素晴らしい城があり、城下町の名残もある。町名にしても一部で失われたものもあるが、三の丸、与力町、鷹匠町など昔ながらのものがまだ残っている。こういったものを大切にしながら、しかもそこに住む人々が快適に生活でき、観光客の皆さんにも満足していただける、そんな都市を行政と一緒になって考えていくことが大切である。

中平松鶴「高遠」

ヨーロッパの例をひくまでもなく、昔から伝統のある都市には、長い歴史のなかで伝えられ磨きあげられてきたものがある。それがあるときは燦然と輝き、あるときはいぶし銀のように重く深い味わいをみせている。これらは全て、すぐれた見識と長期の展望、周到な計画のもとに、長い時間をかけて築き上げられたものである。

日本のようにここが空いているからなにかを建てる、あそこが空いたからこれをというように、細切れにやるのではなく、何十年、何百年もの先を見通して、長い時間をかけてつくっていく。そしてそこには自分の町を愛し、伝統を頑なにまもり続けてきた人々のこころがある。

こころは人々に内在するスピリッツであるとともに、行動を律するものでもある。世界で日本人がばかにされるのは、マナーの悪さの故である。悪いと思ってやっているのではないだろうが、自然に態度に出てしまう。「己の身を律すること」が欠落しているからである。

建物や施設の個性的な整備とともにこうした心が大切にされてこそ、本当の風格ある都市づくりが可能になる。

（入交産業株式会社会長）

鎌倉カーニバル

横山　隆一

昭和十二年、私は、東京から鎌倉へ引っ越して、鎌倉ペンクラブへ入会した。その時、会員は八十人位いて、ほとんどの人は有名人だった。学者、作家、画家、映画人、音楽家で、中でも作家が多かった。その作家達を鎌倉文士と呼んでいた。かつて芥川龍之介や夏目漱石も住んでいたそうだが、私の来た頃には里見弴さん、高浜虚子さん、有島生馬さん、久米正雄さん、大佛次郎さん、小林秀雄さん、永井龍男さん、林房雄さん、島木健作さん、今日出海さん、川端康成さん達がいた。私の後から中山義秀さんや吉屋信子さん、高見順さんが移り住んでペンクラブへ参加した。

私が鎌倉へ来る前の年、久米さん達の発案で〝鎌倉カーニバル〟が開催された。久米さん達がフランスのニースのカーニバルへ行って行列に参加して、鎌倉でもやりたいというので、はじめたのである。しかし日本では戦時色が濃くなって来たので、一回だけで中止したのである。

戦争が終ってしばらく経った昭和二十二年に、久米さんから、「〝鎌倉カーニバル〟を再開するので漫画集団で応援してくれ」という。漫画集団は、現在は百人位いるが、その頃は、まだ三十人位だった。集団の院外団（とりまき）が五十人近くいたのでその人達にも鎌倉へ集まってもらうことになった。

集団が応援するといっても、集団には金がないので、新聞や雑誌社を回ってお金を集めた。マスコミが、カーニバル復活を紙上で派手に取材発表していたので、寄附金もよく集まった。

鎌倉ペンクラブの人達が、カーニバルの行列へ投げかける紙吹雪を作る事になった。紙吹雪はお祝いの時投げるもので、外国ではコンフェッチと言っている。コンフェッチを作るのにいい材料がある事を私は思いついた。

戦後、私は、小林秀雄さんや永井龍男さんから誘われて「新夕刊」という小さな新聞社へ入った。「新夕刊」の漫画部には清水崑君や田河水泡君達と弟の泰三もいた。この新聞の小さな印刷機で刷った新聞の耳を断裁すると、細長い紙きれが出来た。それをそろえて切ると、コンフェッチらしきものが出来るのである。

「〝鎌倉カーニバル〟はお客を鎌倉へよぶのだから、鎌倉駅も応援してほしい」、と私は鎌倉駅長に会って頼んだ。新橋駅長から鎌倉駅長へ、国鉄の公用便で紙片を運んでもらえないだろうかと申し出た。ＯＫが出たので、私は新聞社から紙包みをリヤカーで運び、新橋駅長に渡し、電車で運んでもらった。

白い紙だけでは面白くないので、色の紙テープを切ってまぜた。川端康成の奥さんや久米夫人、永井夫人、高見夫人も手伝って、はさみでチョキチョキ、新聞の耳を小さく切った。おしゃべりをしながら楽しそうだった。

漫画集団は海岸の別荘を借りて、そこで、行列のだし物を作った。頭にかぶる人形である。それを夕方になって駅近くの本覚寺というお寺へ泊めてもらった。

私はカーニバルの選者もやっていたので、行列の途中で抜け出して、参加した催し物から入賞者を選ぶ役目もやった。その時、個人参加でかっぱ踊りをやっていた男を一等にした。その男が三木のり平君だった。のり平君はラジオから出発して映画に出たり、とうとうスターになった。

そのカーニバルで会長の久米正雄さんは、八幡宮の宮司の衣装で人力車へ乗って、行列の先頭にたった。

あれから、すでに四十年経った。あの頃の作家はほとんど亡くなった。今でも元気なのは、永井龍男さんだけになってしまった。

今年、鎌倉では〝一九八九年鎌倉古都展〟を開催するが、カーニバル復刻版も議題にのぼっている。

（漫画家）

星月常運歩の記

横田　熙生

昭和六十四年の新春を迎へ、私は満九十歳となりました。

少年の頃はどうした生まれでありませう、至極学校嫌いでありました。そうでありませう十五歳の時親の知らぬ間に家出を致しました、一人っ子でありながら大した問題ともならなかったと、記憶しております。神戸、大阪、京都、東京と、その時を得まして書生に住み込みました。些か絵心を得まして、二十歳の頃兵役の為に帰郷しましたが、新たな願いを持ちまして、大和絵の勉強の為に、二十歳を過ぎる頃再び東京に出向きました。勉学の半ば夫の関東大震災に会ひまして、心ならずも高知に帰ることになりました。

学歴のない私には、就職先がありません、にも拘らず、年頃ゆえ薦められて妻を娶り、女二人、男一人の親となりまして、両親合わせて七人の家族となりました。家計は主として親が見てくれました。世間知らずの私も、何とか良い道を見付けたいと念じました。そこで少々絵心もありますので、友人に頼み絵の仕事に就くことが出来ました。その頃から暇をみては夜となく、昼となく県立、市立の図書館に熱中して通うようになりました。古典の文学、主として、宗教哲学と美学に関係のある書物を二十年余り勉強いたしました。

心なき愚かな私にも、思いがけもありませぬ春が参りました。県立図書館長中島鹿吉先生の御骨折りで県立女子医学専門学校に勤める事になりました。それからは県立女子大学、高知学園短期大学の教授として七十七歳まで奉職致しました。その間小津高、丸の内高、土佐高、保育専門学校でも教鞭をとりました。三十余年の学究生活は寒苦に耐え春を得て花の咲く思いでありました。

少年の頃彫刻にひそかな思ひを持っておりました。何かを創造せんとする其の可能の精神、其の悩みを彫刻に於いて見たいと思ひました。その願ひもどうやら叶いまして、今日までささやかに彫刻の制作を続けております。

◇　◇

私の思いでの主体は読書にあります。読書に依りまして自我を知り他我を知るのであります。

『論語』　学而第一

子曰、学而時習之、不亦説乎。
有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不温、不亦君子乎。

『いろはにほへど』

色は匂へど散りぬるを、我世たれぞ常ならむ、有為の奥山今日越へて浅き夢見し酔ひもせず

これは般若心経とかかわりのある法語であります。無常と而今そのまことを知る知慧を説いております。

『源氏物語』

その趣は、もののあわれであると本居宣長も述べております。無常なるもの常ならざるもの、それはなかなかの難問題であります。萬巻の書を読みて解脱することであります。

心とはいかなるものを言ふならむ墨絵にかきし松風の音　一休禅師

春になる桜の枝はなんとなく花なければもむつましきかな　西行法師

流れ行く木の葉のよどむえにしあれば慕れての後も秋は久しき
散り残る岸の山吹春ふかみ比のひと枝をあわれといはなむ　右大臣実朝

石山の石より白し秋の風
秋深し隣はなにをする人ぞ　芭蕉翁

かげろうや碑塚の外が往いなり　子規居士

人の悟りを得るに水に月のやどるがごとし月ぬれず水やぶれず尺寸の水にやどる全月も弥天も草の露にもやどり一滴の水にもやどる　道元禅師

最初に言葉あり、その言葉は神と共にあり、その言葉は生命なり、言葉は人の肉体に宿る　聖書『ヨハネ』

読書は思ひ出にも只今の私の内にも生きております。まことに純粋なる喜びであります。

（彫刻家）

珊瑚

その可能性を求めて

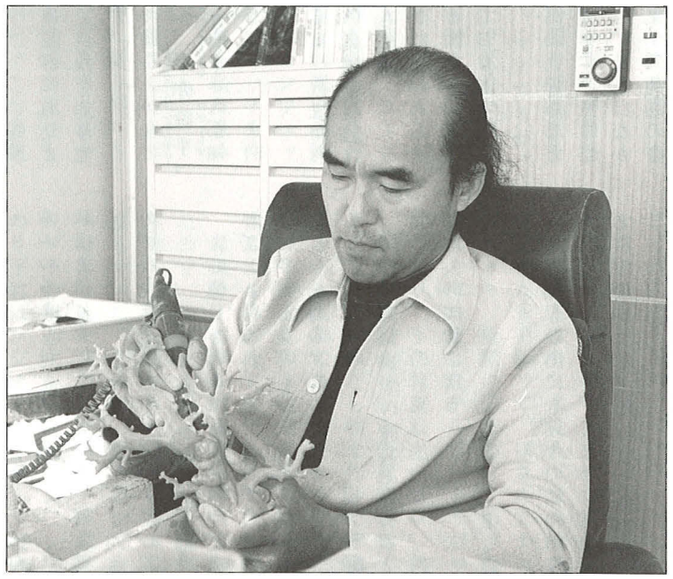
前川泰山

珊瑚が装飾品として作られた歴史は、イタリアにおいては二千年の長い歴史がありますが、彫刻として世に出てきたのは日本では明治初期のことだそうで、他の工芸品に比べると歴史が浅く、それ故にまだまだ開拓されていない可能性が秘められているということが私を引きつけた最大の魅力でした。

私は十五歳の時に弟子入りして十年間、みっちり伝統技術を修得いたしました。七～八年目頃から「珊瑚――その可能性を求めて」というテーマに興味を持ち、まわりの皆さんのご理解に支えられながら、私は珊瑚の持つ未知の世界へと足を踏み入れていくことになるのです。

珊瑚には大きな制約が三つあります。まずその希少性から大へん高価であること、自然素材であるゆえ千変万化の形態をしていること、そして色は白から赤までの暖色系のみであること、その制約の中で作家は自己の持つイマジネーションを探り出さなければならないのです。と言うよりも、その素材の持つ特性をいかに活かすかということを素材と語り合わなければならないのです。しかしその時、あまりに素材の形態のみに捉われると自己の主体性が失われ、個性のない作品になりかねません。素材と自己、その相互主体性の中からの語らいにより珊瑚彫刻は始まるのです。

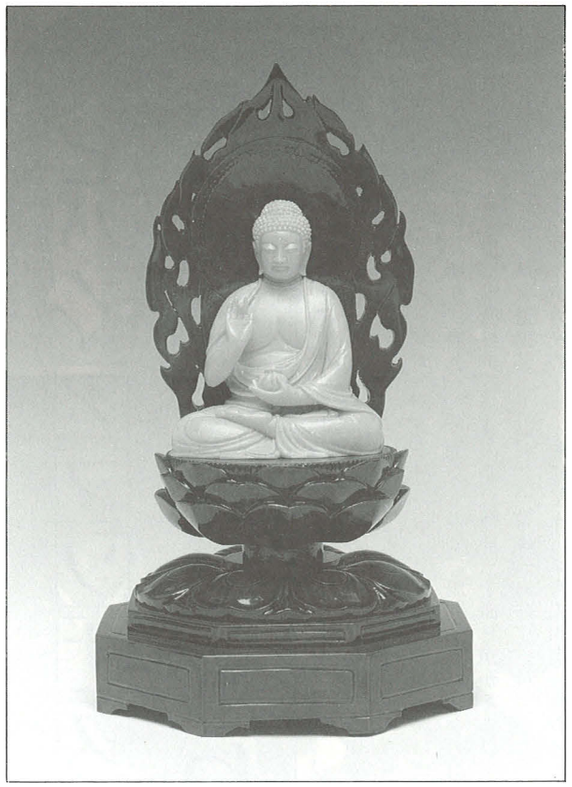
しかしながら、多くの素材の中でイメージとして決定的になるものはそう多くはありません。どうしてもイメージが湧かない素材は、何年もの間机の上で眠っているのですが、ある日突如として眠りをさまして作家に語りかけてくることもあるかと思えば、なおかつ対話のできないこともあります。時に、思い切って槌で枝を折り払ったり割ったりという荒療治に出る事もあります。〝大胆にして繊細〟と申しますが、まさに大胆さから新しい命が芽ぶくことがあるのです。この語らいの時間が構想の段階で最も大事なポイントです。



さらにその上に「詰め」の語らいをいたします。モチーフは勿論のこと、傷は出ないか、色の出具合等々検討した上で決定的な線が出て初めて彫りにかかるのです。よく「その作品を創るのに何日位かかりますか」という質問をされますが、構想に費やす時間は計り知れるものではありません。神秘の海底で、何百年、何千年の年月育まれてきた命を再び甦えらせて、地上のものとして、観る人の心の琴線に触れる作品を生み出すことが私達珊瑚彫刻師の仕事なのです。

まだまだ一般の方は珊瑚細工というと繊細な技術だけで刻まれたものという見方をしているかも知れませんが、珊瑚彫刻、特に美術工芸彫刻の分野では細工と異った要素が要求されます。物に感動する感性、そのためにはそれらを形成する要素の観察眼、洞察力、その物に対する知識、それらを消化形成する感覚、創作力といったものが不可欠です。

珊瑚彫刻を志す者にとって必要なものは、根気、道具を使いこなす技術・器用さ、そして最も大事な感覚つまり物を創作する創意性で、この三つが揃って初めてその素材の特性を自分の物として達成することが出来るのであります。

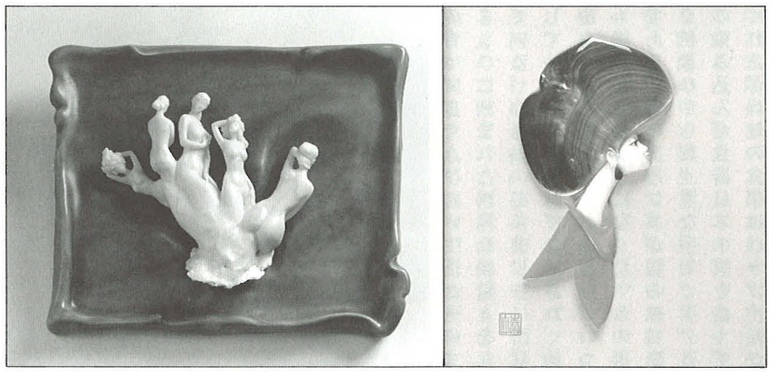


地球生成の時代より生まれた「珊瑚」
深海の命の宝庫「サンゴ」
そして
まだまだ多くの謎に包まれた生態
創作する上に於いて多大な可能性を
含有している海の宝「さんご」
此のロマンに満ちた命
情熱の紅い炎と化して
そのロマンを追い求める漁夫
そんな想いをふと感じる時、
作者は快いまどろみに浸る……

昭和四十七年に初めての大作、壁面画で畳三枚分位のものを創って以来、後援して下さる業者の皆様方のご理解もあり、毎年のように大作に取り組んでまいりました。作品の良し悪しは別として、この十数点の大作は、私に大きな可能性の示唆を与えてくれましたし、また最近、異素材（金・銀・銘木・貝・べっ甲・貴石等々）との組み合わせにより、その変化のある可能性は大いに広がってきました。

最近、特にこの年になりますと、芸術家だとか先生だとか言って下さる方が増えてきましたが、私自身は全くそんなふうに思っておりません。芸術家である前に、立派な細工師であり、マンネリに落ち込まない職人であり、創意性のある「もの」を創る人でありたいと常々思っている次第です。

この道一筋に歩んで三十五年、一昨年は高知市技能功労賞、昨年は高知県産業技術功労賞と度重なる光栄に浴し、その責任の重大さを痛感しております。また私の長年の念願でありました就業三十五周年を記念する個展を去る十一月十一日から三日間、高知新阪急ホテルで開催しまして、予想を遙かに上回る多数の方々に、珊瑚工芸というものを、新たな認識で鑑賞して頂く機会が持てましたことは、大変大きな励みとなりました。



「珊瑚――その可能性を求めて」これまで私は歩んでまいりましたし、これからも歩んでまいりたいと思っております。そういう過程の中で芸術性の香りのするものを創りたいという努力は決して忘れるものではありません。

（珊瑚彫刻家）

ビバ！アマソナス

Ⅲ・アミーゴのくらし

山崎　啓一

道路調査のため、ペルー・アンデスのコラコラ村へ赴任することになった。首都リマを早朝に発ったオンボロバスは、砂漠の中のパン・アメリカン・ハイウェイを直走り、地上絵で有名なナスカを経由して漁村チャラで夕食をとった後、舗装道路と別れ、腸がねじれそうなガタガタの山道を登り始めた。

途中の停留所より乗り込んでくる乗客は家畜を連れたインディオが多くなった。荷棚では足を縛られたニワトリが悲鳴をあげ、通路には袋につめられた犬、羊、ブタ、ヤギがころがり、まるでふれあい動物園のようだが、すぐに床は動物の排泄物で汚れ、追いうちをかけるようにインディオのおばさん達が小便やたまに大きいのをするものだからたまらない、車内は異様な臭いに包まれてきた。「こりゃあ、えらい所へきたものだ（夜行のバスは三～四時間ごとにしか停車しないので、通路をトイレにするのも仕方ないが）」。

こんな珍道中の末、二十八時間かかってやっと標高三千二百mのコラコラ村へ着いた。この所要時間は標準的なもので、雨期やエンジンの機嫌の悪い時に三～四日かかるのはアンデスの常識である。

着任早々、さらに山奥に住むインカの末裔ドミンゴ老人より要請を受け、道路測量のキャラバンが始まった。混血の測量助手一名、インディオ三名の人員で標高四千m以上の高地を渡り歩くこと二週間。測量といっても距離と勾配を測りながらルートを決める基礎調査なので、一日に十km以上をかせぐ事ができた。夜は点在する民家に泊りながら、四日目にドミンゴの家に達し、以後この家をベースに周辺の調査に当った。

ドミンゴの家は駅より徒歩四日、電気・水道・ガス・フロ・トイレなし、陽当り最高、風通し良好、水場まで歩いて十五分、周囲四km隣家なしの極めて閑静な環境にあり、壁には石を積み、屋根はワラぶきで、土間にアルパカの毛皮を敷いて生活している。トイレがないので生理現象は家の周りで済ますのだが少しも臭わない。用を足すと犬がきてすぐ仕末してくれるのだ。

またフロがないのはインディオに入浴の習慣がないからで、ドミンゴは「入浴すると死ぬ」と言っていたが、四千mの高所で入浴して風邪をひくとすぐ肺炎にかかりそうで生活の知恵である。最初のうちはインディオの臭いが鼻についたが、三ヵ月後、首都へ出ると私自身がペルー人から顔をしかめられる立場になっていた。

ドミンゴは六十五才の長老で、その育ってきたきびしい生活がそのままシワに刻まれた精悍な顔付きをしている。片目は「二年前に牛に酔狂していて角で突かれてつぶされ、治療を受けれず放っておいたら、いつも膿がにじむようになった」との事である。そのドミンゴが服の袖で膿を拭きながら真っ黒な手で、手アカの染み込んだ食器にスープを盛ってくれる。当地の食事はジャガイモかヒエのスープにトウモロコシが主食で、目玉焼が出れば大ごちそうだ。

夜はランプの下に近所の人（近所といっても四～五kmは離れている）も集まり、エチルアルコールに砂糖を混ぜた御神酒を回し飲みしながら、インカの昔話や彼らにとって宇宙以上に遠い日本の話に花を咲かせた。

パンパを渡る　はぐれ鳥
今日はいづこのねぐらやら
パンパに燃ゆる　わが命
明日のペルーの礎に
パンパを染める　あかね雲
流れて飛んで日本まで

ペルー・アマゾンの首都イキトスで雑貨店を営む若月さんとは、初回のアマゾン下りの時、ブラジル国境のタバチンガの波止場で出会った。彼から「日本人ですか」と話しかけられ、すぐに意気投合して酒場で杯を重ねた。彼はずんぐりしたいかにもスタミナのありそうな体つきで、少年のように澄んだ目が輝いている。静岡県の出身で熱帯魚好きが嵩じて、フリーのライターとして熱帯魚の雑誌アクア・マリーンなどに投稿しながらアマゾンを三回旅し、三回目に二十五才も年下の娘といい仲になり、所持金をはたいてイキトスのバガサン地区に家を買い、所帯を持ったそうで、五才になる娘がいる。

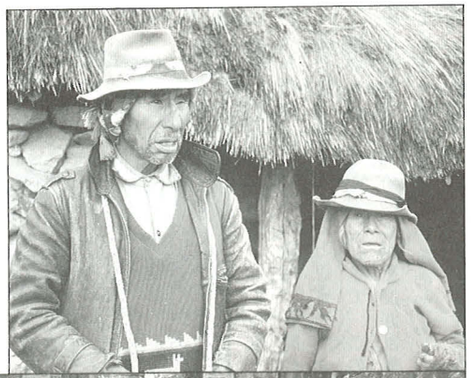
商売の最初はビール一箱だけの在庫で酒店を開き、一本が売れるとすぐに買い足しに走るなどまめに働き、今では生活用品のすべてを揃えた店「ＦＵＪＩ」を営んでいる。ペルー人と結婚したものの今だに観光ビザしか許可にならず、半年毎にビザ更新のためブラジルへ出国している。「今度イキトスへ来たら、バガサンで日本人の店といって訪ねてきてくれ」と言われ、別れを告げた。そして私はマナウスまで下り、さらにブラジル国内を回る予定であったが、若月さんと酒を酌み交したくなり、マナウスよりイキトスまで引き返した。

バガサンの彼の店はすぐに分かった。彼も私がきっと来るだろうと、中国の漬け物を用意して待っていたとの事で、出会いの不思議を感じた。休暇も一週間残っているので彼の家に居候を決め込み、昼間はすぐ裏を流れるアマゾンで子供達と遊び回り、夜は店先で涼をとりながらビールを飲みアマゾンの話に時の経つのも忘れた。アマゾンの家は平屋でも天井が高く、昼間はさすがに蒸し暑いのだが、夜は風通しも良く快適である。また水道はアマゾン河より直接引いてあり、殺菌などの処理をしてないので最高にうまい水である。

若月さんは、「アマゾンの時間の中で太陽のリズムにあわせて生活していると、今さら日本の狂ったような時間の中では生きていけない」と言っていたが実感である。また彼は、ペルー、ボリビア、ブラジルのアマゾンはほとんど踏破したが、コロンビアとペルーの国境を流れるプツマヨ河だけは最後の夢として残しているとのことだ。この河は外国人の立入りが制限されており、それだけに開発の魔の手も伸びず、本当のアマゾンが残された最後の聖地だといえよう。「お互いに落ち着いた生活をおくるようになったらぜひ行こう」と飲む度に熱っぽく誘われ、プツマヨ下りは二人の共通の夢となった。

帰国して健康診断の結果、私の腹の中ではアマゾンのお土産が暗躍していた。ランブル原生虫と吸血虫卵である。寄生虫はすぐに駆除できたが、あのアマゾン・ハイの禁断症状は日を追って強まっている。また行こうアマゾンへ、アミーゴと飲みあかし、プツマヨを下り、時を忘れに……。

（地方公務員）



右・ドミンゴ夫妻
下・「ＦＵＪＩ」の店内で若月さんと酒を酌み交す筆者

ビバ！アマソナス
＝アマゾン万歳！
アミーゴ＝友、友人

ご愛読ありがとうございました。
〝ビバ！アマソナス〟は今回をもって終了させて頂きます。

南からの移住者

宮地英彦

私が、この鳥に気づいてからもう二十年は経った。その数は、当時の十数倍には増えていると思う。

彼女らは、小型のツバメで、この寒空にも、高知市の上空を旋回乱舞しながら群飛行しているのである。四、五十羽、ときには百羽以上になろうかという集団だ。

彼女たちは、ヒメアマツバメという南方からの移住者である。

ツバメといっても、この鳥は渡り鳥ではない。鳥類辞典によれば、台湾、中国雲南地方以南に生息する南の国の留鳥である。

それが、地球的異変によるものか、強い南風にのって漂着したのか、或いは気まぐれなのか、ともかく北上し、ここ高知市役所にやってきて、コンクリート打放し壁面に営巣し、住民登録をすました。かくしてこの二十年、高知市の住人として住みつくことになったのである。

最初、ヒメアマツバメということを知らなかった私は、「多分イワツバメだと思うが、ここで珍しく越冬しているので、巣をこわさないように」と庶務課長に頼んだ。当時五つ六つ位しかなかった巣が、今では、市役所だけでも五十を越え、周辺のNTT、三翠園の方にまで移転拡大している。

それらの集団が、食餌となる昆虫を求めて、この空を飛んでいるのである。晴れた日は空高く、雨の近い曇った日には低く飛ぶ。ヒメアマツバメと名付けられている所以だ。

低く飛ぶとき聞える、キヨッキヨッ、キーキーと叫びに近い鳴き声は、何故かもの悲しい。

このヒメアマツバメは実に奇妙な鳥で、生活する表情をなかなか人間にみせない。彼女らは飛翔しているか、ねぐらとしている巣のなかに居るかどちらかであり、その行動は極めて簡潔である。電線や樹に止まることもなければ、地面に降りることもない。人間社会とは、ことさらに一線を画しているようにみえる。

およそ山野の羽族たちは、私共に美しい姿をみせ、時に歓喜の歌を聞かしてくれる。とくにツバメ族の育雛期は、給餌する親と子との愛の交流を、人間社会のごく近くでその姿を見せ、可憐である。ところが、このヒメアマツバメは一切それを見せない。壺状の巣の入り口は小さく、そこからピユッと飛び出て、ピユッと入るだけだ。つき合いがぶきっちょうなだけに、一層いとおしさが募る。

ある日、巣立ちに失敗した幼鳥がベランダに落ちて、うずくまっているのを掌にのせて観察してみた。頭から背にかけての黒褐色のビロードの光沢は、一瞬たじろぐばかりの美しさがあり、気品のある瞳は、奥目で鷹の如く鋭い。彼女らの日頃のすべてが、その容姿、表情に凝集されているようで、粛然たる思いがした。

◇　◇

この鳥たちの仲立ちで、思いもかけない出会いに恵まれることとなる。野村みよ子さんと内村満紀さんのお二人だ。ご両人は、とてつもなく熱心な野鳥の研究観察者で、一九八五年二月より一年間、市役所の片隅でこのヒメアマツバメの生態を観察し続けた。寒い風の日も、西日のきつい夏の日も、化石の如く動かず、双眼鏡で巣を睨み通した。

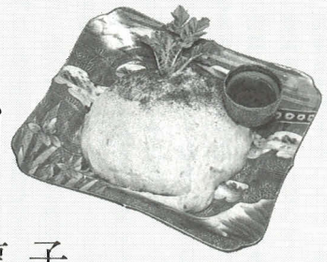
この程、「高知市における、ヒメアマツバメの繁殖スケジュール」というレポートを作成され、私も頂戴した。中味は精緻を極めたもので、行動、習性、産卵から抱卵、日本にその例のない年三回の繁殖、育雛の模様、巣立った幼鳥が再び巣に戻らないことなど、私の知らなかった空白部分をほとんど埋めてくれた。次には、幼鳥の標識調査に挑みたいという。これは困難を極める作業で、できれば私も協力者にさせてもらいたいと思っている。

この珍しい鳥、ヒメアマツバメは、既に高知市の鳥となったのだ。実に嬉しい。中学三年の時、中西悟堂著「野鳥ガイド」を一円二十銭で買い求めて以来、野鳥とは永いつき合いだが、いろいろと楽しい思い出の中でも、これは格別なもののひとつである。

高知は、冬でも多くの空中昆虫がいる素晴しい空だ。彼女たちが、この地を選んだ重みをゆるがせにしてはならない。私たちは、美しい空を保つことに努力し、彼女たちといつまでも、付き合っていきたいものである。

（高知市助役）

皿鉢でもてなす土佐の正月



写真：『聞き書高知の食事』より

松崎淳子

皿鉢料理の基本は「生（なま）（さしみ）」と「組みもの（盛り合わせ）」の二枚である。三枚目は、もう一枚組みものとなったりそうめんになる。四枚以上になると生の二枚目は、たたきやぬたがけになる。殊にどろめのぬたは最高。この他にぜんざい、みつ豆、季節によっては山芋のとろろ、ごりやにろぎの汁。それに「たま蒸し」や「いり（大魚のいりつけ）」が加わると、組みものは六～七枚にも増え、大客（おおきゃく）のメニューとなる。

◎生

高知のご馳走は先づは魚、それもさしみをりぐる。早早（はやばや）と持ち出さずに、間際に作って切りだちを出す。

さて、南国市の棚野薫さん直伝の一品を紹介します。

《松の皿鉢》

細身でくねった五寸くらいのさつま芋を幹に見立てて、五葉の松の枝先を五～六本挿す。大根の輪切りへ竹串で固定し皿鉢の真ん中に置き、根元を大根のけんで被って青のり粉をふる。このまわりに平作りのさしみを並べると、まるで苔むした岩場に立つ老松へ波が打ち寄せているように見える。目の下一尺二寸の鯛の生け造りにはかなわないが、めでたさを演出する知恵である。

◎組みもの

昔はすしと野菜を主にした料理に果物や甘いものを盛り込んだ。今ではまるで蛋白質の大競演、お金を出せば出すほど、エビ、カニ、貝、クラゲetc、それも冷凍ものオンパレード。これでは、高知市で、また足摺でと旅の客はたまるまい。

すし　鯖、甘鯛、かますなどは姿で、太刀魚ならかいさまに。それに巻きずし、いなりずし。こぶずしがあればリッチです。

《こぶずし》

白い板昆布を甘酢っぱく煮て巻のりに見立て、丸く巻かずに両褄（つま）を折り込み平たくする。芯は入れない。幡多では、黒くて柔いすし用の昆布を売っていて、これは丸くするが、飯にはきびなごのじゃこが入る。

和えもの　酢和え（酢味噌和え）、白和え、酢のもの。葱の酢和え、人参の白和えはよく使う。酢のものに弘岡かぶで作る酢かぶもおいしい。

《葱の酢和え》

青葱かにんにく（葉）を茹で、水にとられずに俎の上に広げて冷ます。そうすると、色もあせず甘みが残る。茹でたイカと酢味噌で和えると酒には合い口。

煮もの　筍や根菜を甘く煮たり、ごぼうを甘酢で煮て唐辛子をきかす。ぜんまいやわらびの炒め煮に新鮮さを感じる人もいるようだ。

《しなしもの》

魚のすり身に高野豆腐をくっつけた高野づけ、凍りこんにゃくをくっつけた凍りづけ、椎茸をつけた椎茸づけをたっぷりのだしで甘く煮込んだものをしなしものと言って皿鉢には大てい仕込んだものだが、今は揚げものが口に合うらしく、人気がない。

羊かん　夏は水羊かん、肉桂をきかしたり、道明寺を入れたりする。冬は練り羊かんと蒸し羊かん。

《蒸し羊かん》

小豆で餡を作って小麦粉を練り込み、かまぼこ型にして蒸す。小豆500g、砂糖500g、小麦粉200～300g。四～五十分くらい蒸す。餡は粒でもこし餡でもよい。

その他　照り焼き、揚げもの、果物、きんとん。春野あたりならあたらしやとか、とら巻きなども盛り込む。

《はんべん》

これも棚野さんの受け売りだが、魚のすり身に山芋をすり込み、卵も足して程よい硬さにし、皿鉢に入れ蕪（かぶ）の形に整える。大根か蕪の葉の芯を差し込み、根元に青のり粉をふると、絵のような作品になる。猪口に酢醤油を入れて添え、箸でもくい取ったとろろを一寸浸しては食べる。精がつくという。

（高知女子大学家政学部教授）

素顔の子どもたち♥第1回

『四万十川　あつよしの夏』

門田雅人

私は一九八六年、父の病をきっかけにして、須崎市安和から西土佐村へ勤務地を変えて里帰りした。西土佐村は、決して狭くはないが小さな過疎の村だ。香川県より広い幡多郡の中で、大正町、十和村、西土佐村は北幡と呼ばれる地域で、四万十川の中流ないし下流に位置する。なぜなら、四万十川は高岡郡の東津野村や梼原町に源を持ち、窪川町を経由して河口が隣の中村市だからである。ところが、中村の人ばかりでなく、窪川の人にも「西土佐村は山奥じゃねえ」と言われてしまうのだから、四万十川も罪な流れ方をしている。

四万十川　　大江満雄

おもうほど　おもうほどに
ふるさとは　雨と嵐
山峡の水もくるうて流れあふれる
豪雨の日
天のはげしきを
おもうほど　おもうほどに
ふるさとの雨の降る日は美し

四万十川の水のにごる日はかなし

大江満雄が想いを寄せた故郷がどこなのかは知らない。しかし、この詩の暴れ川四万十川のイメージは、北幡の村々にピッタリと重なるように思う。

私が勤める津野川小学校は「校舎にゲタをはかせて」ある。四万十川の増水対策であり、一階部分に玄関は無く、そこは共同の駐車場になっている。四万十川の水量が増して津野川集落の田や道路が冠水するのは、支流の目黒川が逆流するからだ。「この頃は、田んぼがつかるほどの大水も減ったけんど、アユもよいよおらんなった」とお年寄りが嘆く。

＊　＊

夏休みも近づいたある日、ＮＨＫのディレクター伊藤さんが学校を訪ねて来た。「ラジオドラマ『四万十川あつよしの夏』を収録したい」と言うのである。しかも、オールロケで津野川小学校の子どもを全編使うらしい。この日、私たちにとって『あつよしの夏』を巡るドラマの幕が上がった。

作者の笹山久三さんは、私とほぼ同年代。実家は、学校の目と鼻のさきに見える。出身高校は、小学校の南隣にある中村高校西土佐分校だそうだ。子どもたちにとって、とても身近な人が小説を書き、文芸賞を取って文化の送り手として活躍しているのである。

今、西土佐村の子どもたちは、ビックリマンシールの狂騒やファミコンの流行も、街の子と同じように経験している。しかし、テレビや雑誌のどれをとっても、都会から一方的に流される情報を受け入れる以外はない。『あつよしの夏』のドラマ作りに参加することは、文化の送り手になる取り組みである。

津野川の子どもたちは、書き綴ることは得意だ。しかし、人前で堂々と自分の考えを発表したりすることは苦手である。それを高めていくことが私たちの研究課題でもあった。私たち教職員は「収録は夏休み中のことになるけれども、上級生全員の参加で学校ぐるみの取り組みにすること」を決定して、父母にもその意義を知らせた。

明人君（あつよしの兄役）は、収録の様子を次のように書いている。

ぼくの役がらは、長男の和男です。ロケの最中はいつも、本当の名前は明人なのに、和男と呼ばれていました。ぼくはそれがてれくさかったです。

ロケは三日間です。でも、家族のほかは二日で終わりました。俳優は、橋爪さんと左さんの二人が来ていましたが、後は全員津野川小学校の子どもでした。

まず、花いちもんめという遊びでいつもいじめられている千代子が残される場面です。千代子役は、幸子さんがやっています。千代子が泣く場面で、さっちゃんはとてもうまくできたのです。ディレクターの伊藤さんにもほめられていました。（ぼくもあんなふうにほめてもらえるかなあ）と思っていました。　―略―

やっぱり俳優さんだなあと思ったのは、セリフでした。ぼくたちとは、全然ちがうのです。「いただきます」と言う一言でも、ぼくたちはただ「いただきます」と言っているだけなのに、俳優さんは、心をこめてとてもまねのできるもんじゃありませんでした。　―略―

今まで、俳優さんは別世界の人で、ぼくたちと仲良くなれるなんて夢にも思いませんでした。橋爪さんたちとソフトをしたりしてとても身近に感じました。また、テレビドラマを今までは当たり前のように見ていたけど、このラジオドラマに出て、俳優さんの苦労だけでなくスタッフの苦労を知ることができました。俳優さんが、あんなに上手に役になりきるには、スタッフの協力もあるんだと分かったのです。

『四万十川あつよしの夏』は、八月二十七日夜ＮＨＫＦＭシアターとして全国放送された。あつよし役の和幸君、千代子役の幸子さんたちの熱演は見事で、また全員の声が入る花いちもんめの場面や千代子をいじめる場面は、臨場感と迫力があった。九月の参観日には、授業参観の後、児童と父母とで録音を聞いて、この値打ちを確め合ったのである。

＊　＊

十月十六日、村の福祉大会が持たれた。津野川小学校も毎年参加しており、今年は、『あつよしの夏』を再構成して出場することを決めた。主要場面を限定して説明でつなぐのである。ラジオドラマの配役は、教職員の話し合いの結果、たまたま決まった役柄だったのだが、結果的には、華やかに注目を集めた子と引き立て役に回った子とに分かれてしまった。そこで、今回は再構成の脚本を私が書き、配役については、できるだけ主客の交代をしたのである。これは、女先生の強い要望でもあった。やはり、女の人は細やかに子どもたちを見ていると脱帽せざるをえない。

ラジオでは、出番のなかった多重さんが最初の説明をする。そして、三、四年のナレーション……。ラジオドラマの到達点を見て出発した再構成朗読劇は、はじめ様にならなかった。しかし、しだいに連帯して取り組む雰囲気が盛り上がってりっぱに上演することができた。

地元の先輩が書いた小説のセリフは、高知弁でも中村弁でもない、この西土佐村の言葉だった。自分たちの言葉で、自分たちの仲間を見つめながら取り組むことができた私たちの『あつよしの夏』はこうして幕を降ろした。

（西土佐村立津野川小学校教諭）

高知の明日を考える　**高知レポート**　豊富な資料と論考

新刊●高知レポート２
いかにすれば都市の河川はよみがえるか
今井嘉彦著　Ａ５判　108頁　定価1,000円
病んでいる都市河川を回復させるための大胆な提言を、具体的な事例と資料をもとに述べた好著。

最新刊●高知レポート４
土佐の自由民権運動
外崎光広著　Ａ５判　156頁　定価1,000円
土佐における自由民権運動に対する誤解・偏見等を正し、その役割を語るうえで欠かせない、土佐人必読の本。

文化セミナー　高知の文化の独自性を考える

森木　房恵さん
（ユナイテッド航空スチュワーデス）
「高知の国際化」
●1月21日(土) PM2:00～4:00
●共済会館3F
●参加費　無料

上田　篤さん
（京都精華大学教授）
「21世紀の都市は迷路（ラビリンス）になる」
●2月22日(水) PM6:30～8:30
●高知グリーン会館 2F
●参加費　無料

ソウルを走る

小倉輝美

八八年ソウルオリンピックで、私は自転車競技女子個人ロードレースに参加しました。自転車競技には、ピスト競技とロード競技があります。ピスト競技とは陸上でいえば短距離種目に、ロード競技は長距離種目に相当します。私が参加したのは後者です。

ピストとロードは走る場所もバンク（競技場）と道路というように異なります。自転車の構成もブレーキ、変速機の有無で異なります。ロード競技では、ロードレーサーというブレーキ、変速機付きの自転車を用います。この変速機の操作で、コースと体調に合わせてどんなギア比（ギア比によって足にかかる負担が変わる）を選択するかによって勝敗が左右されます。

自転車の面白さは、自然を肌で感じられるということもありますが、自転車という道具を使うスポーツであることだとも思います。道具を使うということで、実力プラスα＝道具を使うテクニック＝も要求され、ゲーム的な要素が多分に入ってくるのです。単に体を使うだけでなく、頭を使う面白さが自転車にはあるのです。

ロードレースは距離は様々で、日本の女子レースの場合、四〇キロメートルから六〇キロメートルくらいが一般的です。しかし今回のオリンピックでは、女子八二キロメートル、男子一九六キロメートルという長丁場でした。コースは一周一六キロメートル余りの周回コースで、五つぐらい緩い坂がありました。本番二日前に下見で走った時は、きつい坂だと思いましたが、当日は集団走行で風の抵抗も少なかったので、ほとんど気になりませんでした。

レース参加者は五十五名。自転車界の名選手もたくさん来ていました。各国エントリー数は最高三名、日本からは関さんと私の二人でした。試合前日はそれほど気負いもなく、緊張しすぎてガチガチという状態ではありませんでした。当日は「今日この日の為に今までやってきたのだからやれるだけやろう」と思いました。

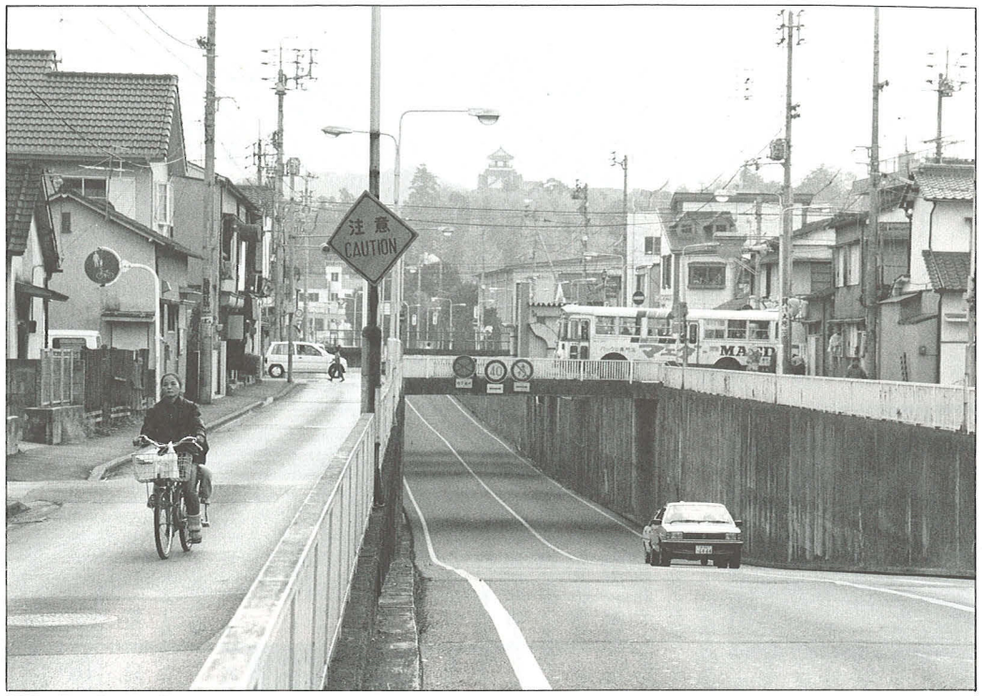
試合の展開は、トップ選手の一人が怪我をして本調子でなかったためか、多少のスピードのアップダウンはあったものの、四十五名という大集団のままでゴール勝負となりました。このレースでは足よりも気が疲れました。というのは四十五名もの大集団になると周りの人に注意しなければならないからです。トップレベルの人達ばかりですから、それほど危い動き方をする人はいなかったものの、ほんのちょっとした不注意が事故につながる事があるので、注意し続けねばなりませんでした。

また各人、集団の中でなるべく良い位置――風の抵抗が少なく、いつでも逃げる事ができる、落車に巻き込まれないような位置――をとろうとするから、寄ってきたりすることがしばしばありました。危い時は、その人の腰を軽く押したりして自分の存在を示します。また、自分勝手な動き方（急に車線変更する等）はしないのがマナーになっています。これは自分の後ろにいる人に迷惑をかけないためです。競技人口の少ない日本では、四十五人もの集団走行は経験できません。それだけに今回のオリンピックでは多人数で走れ、ゲーム的な感じがして面白かったです。

こうしてオリンピックに出られたのも、周囲の人々の温かい声援があったからだと感謝しています。オリンピックそのものも良い経験になりましたが、オリンピックへ行く前の段階で、自転車競技に対して自分を追い込まなくてはいけない苦しさからの逃避、自分の弱さ、自己が確立できていないこと等の発見があり、自分を見つめ直す良い機会にもなりました。これからも、これらのことを改めつつ、日々頑張っていきたいと思います。

（ロードレーサー）

私の風景



入明町立体交差

平見　嘉彦

踏切なしで鉄路を横断できるのは、市街では、入明の立体交差だけである。真南に高知城が見え、秋は、銀杏が日に輝いて美しい。以前は、大雨の時は、プールのようになり、波をけたてて渡る自動車をみることも稀にあった。

それぞれの仕事

グラフィックデザイナー

三谷　理恵

「クリエイターズデスク ビット」では、ロゴマークやキャラクターを描いたり、ポスター、リーフレット、ダイレクトメール、パンフレット、出版物ｅｔｃ……を作っています。まず、案を出して、コピーを書いたり、撮影の段取りをしたり、最後は版下を作って色指定をします。

印刷物を作る過程の中で、本当は一番恐しいのだけれど、好きな作業は最後の色指定です。これは、自分で色を作って塗っていくわけではなく、頭の中で全体の雰囲気やまわりの色との関係を考えながら、記号で指定していくので、実際印刷してみるまでどんなになるかわかりません。経験を積む中で、だんだん鮮明に想像できてくるのですが、わかっているパターンよりも、何か新しい色合わせを冒険してみたくなるので、いつもドキドキ、ワクワク。失敗もあるけど、うまくいった時はとても嬉しいものです。

最近はオフセット印刷物だけでなく、グラビア印刷物のデザインをすることもありますが、それはまた色具合が全然違います。オフセット印刷物（紙に印刷したもの）の場合は主に広告が目的のものが多いのですが、グラビア印刷物（ビニール系統のものに印刷したもの）は商品のパッケージが主です。だから売れたか売れなかったか反応が直接伝わって来るので、すごく勉強になります。

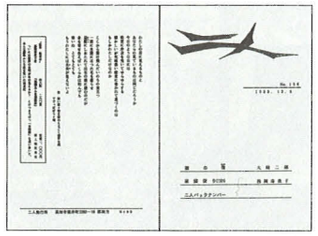
デザインの案というものは、割と一瞬にして出て来るものなのですが、それを形にするための作業が大変で、結構手間暇がかかるのです。納期が迫っている仕事がいくつも重なると本当に嫌になってしまいます。時間に追われて胃は痛むは、年とともに体力は衰えてくるはで、よく何もかも投げうってしまいたい様な気持ちになるのですが、出来上った製品を見るとそれまでの苦労はすっかり忘れてしまって、うれしくなったり、今度はどんな風にしようかなどとすぐ次のことを考えてしまったり……。結局その堂々巡りを続けています。

良きにつけ、悪しきにつけ、自分のした仕事が最終的に形になって残るというのが何よりも魅力的で、やめられないでいるのです。

詩誌「二人（ににん）」

「ひょっと」で二十六年

西岡寿美子



人それぞれ、よそから見れば揺るぎない計画線上を歩いているかに見えるものだが、ひょっとしたことで人生は曲がってしまうのではないか、とわたしは思っている。

大崎二郎氏とわたしの詩誌「二人（にん）」もその通りで、これが生涯の仕事になるとは、わたしらは当初夢にも思っていなかった。「オマンがもうまあ死ぬろうから、死に花を咲かしてやろうと思うて、言うて見たまでのことよ」と、大崎氏が口を滑らしたことにもそれは表れている。

昭和三十七年の暮れのこと、肺切の術後よろよろと街を歩いて出会い、「余命三年」と氏に読まれたわたしである。「二人」は、翌三十八年二月に創刊、無謀にも半病人のわたしを編集者に、隔月刊、年六回の定期刊行としたものである。以来、原稿のことで、経費のことで、わたしの病気で、再三再四「二人」は危機に陥ちた。

しかし、「二人」は満二十六年、一号の欠号もなく刊行を続けてきたし、わたしも氏の予想を裏切っていまだに長らえている。この間、大崎氏は「走り者」など三冊の詩集を、わたしは「おけさ恋うた」ほか三冊の詩集と、「四国おんな遍路記」など二冊の紀行集を、このミニコミの誌面から生んでいる。氏は小熊秀雄賞と壺井重治賞を、わたしは小熊秀雄賞と日本農民文学賞を受けることにもなった。

あのひょっとがなかったら、二人ともどんな人生へ曲がっていたことであろうか。

（二人編集者）

連絡先〒780高知市福井町二二五二―一六

二四―五三九二（西岡）

高知コーラス合笑団

唇に歌を、心に太陽を

村田　忠雄

昨年十二月三日、第三十回の定期公演を終えた私達高知コーラス合笑団は、戦後の混乱も漸く落ち着いた一九五四年（S29）六月十日、丸の内の教育会館で産声をあげた。

「もっといい歌を、もっと多くの人に」「自分達の歌を、自分達の手で」と、大きな希望と夢をもって集まった若い仲間達――もう三十五年になる。いろいろな仕事をもった団員と、共に歌い、踊り、語り合ってきた。当時、青年だった仲間も、めっきり白いものが増えたが、今、その息子や娘達が仲間入りしている。

県教組の音頭で県下各地に足を運んだ文化慰問団、私達の団歌〝僕らの道〟もこの中で生まれた。病院、老人ホーム、養護施設、入学おめでとう会、母子家庭を励ます会、平和の祭典、うたごえ祭典、コンサートグループ、合唱祭等への参加・出演が、踊りやコントへの取り組みを促し、多くの創作曲を生み出した。そして、定期公演の度毎にこの創作曲を発表してきた。

多くの方々の温かい励ましと支援で練習場もできたし、楽器も購入した。

――唇に歌を、心に太陽を――

平和を願い、生活を守る豊かな感性を大切にしながら、今後も歌い続けていこうと決意を新たにしている私達である。

団の創設者であり、〝団歌〟〝おきつ〟〝みのめ〟の作詞者であった今は亡き山本寿一さんの遺志もついで――。

（高知コーラス合笑団指揮者）

連絡先　七二―八六四七

（毎週土曜日pm.七時～）

文旦の会

「旦」はものの始まり

猪野幾久子

一九八三年の五月、五名の主婦の手で「文旦」創刊号を出した。朝日新聞高知版へ随筆を投稿してきた人たちであった。

当時「朝日」高知支局は、新たに週一回文芸と論壇のページを設けて、読者に紙面への参加を呼びかけていた。ローカル色を加えた親しみの持てる内容にしていこうとする意図があったようだ。しかし投稿は以外に少なかったらしく、随想に限っていえば書き手が固定化し、そのうち随想欄は廃止された。残念……という思いが、やがて自分たちでエッセイ集を出そうという相談に発展していった。

もともと投稿という行為は、モノ言いたいという根元的欲求から生れるものである。女たちが「暮し」という小状況の中にあって、主婦特有の現場感覚でもって、時にはみずみずしく、時には鋭く確かな目で、社会の動向を見つめることがある。そんな時、表現という手段がなければ折角の感性を眠らせることになりはしないだろうか。

発刊の時、誌名をどうするかになった。「朝日」は仮名「ぶんたん」だったが漢字もまたよいということになり、そのうち一人が「旦はものの始まり、出発」と言ったことで「文旦」に決まった。どんなに打ちひしがれても人は日々出発する。文もまた私から始まると思いたい。

現在十九号まで発行、同人も八名になった。「あとがき」は皆が持ち回りで書いている。その丸い輪が長続きのヒケツかもしれない。

連絡先　（〇八八七五）三―三二一一

（猪野）

高知バリ会

インドネシアの留学生

石原　一男

現在、インドネシアの留学生五名が、高知大学農学部で農業水産の勉学に励んでいる。この国の教育に対する意欲は極めて旺盛で、日本の各大学に多くの留学生を送り、新興国家建設に燃えている。

留学生にとって、未知で国情の異なる国で、しかも難しい日本語と取り組む毎日はまさに苦難の連続ではあるが、それでもさすがに選ばれた優秀な人達だけに、その進歩は目を見張るものがある。この学生達に、早く日本を知ってもらい、相談相手になり、有意義な日々を過ごしてもらおうとボランティア活動を続けているのがインドネシア友好のバリ会である。

高知バリ会は、昭和五十九年、日本バリ会高知支部として結成された。バリ会は、本来バリに対する理解や友好を深め合う目的で作られ、バリへの旅行者に便宜を計る等の活動もしているが、高知バリ会の場合、広くインドネシア全体を対象としている。

バリ島は、インドネシア中枢のジャワ島に隣接するヒンズー教の神々の島として同国を代表する美しい島である。バリ島はじめインドネシアに興味・関心を持っている二十五名ほどが会員となり、花見、お国料理野外パーティ、よさこい祭りの花火見物と季節折々留学生との交流の場を持ち、楽しい一時を過ごす。

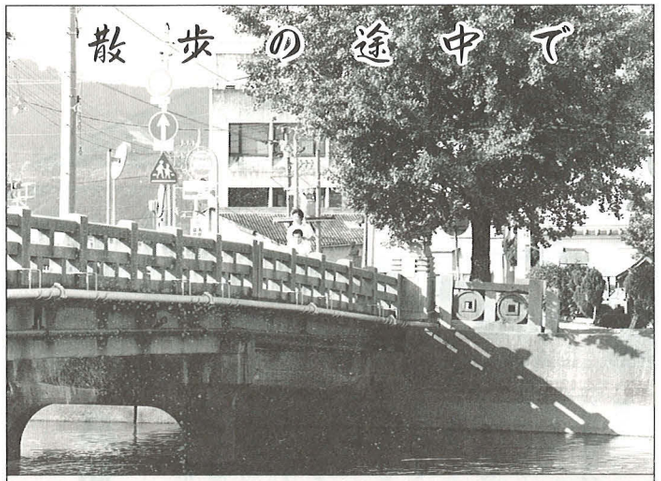
やがて学業を終え国の中枢で活躍するであろうこの人達が、日本との友好関係に果たす役割は必ず大きいものとなろう。

（高知バリ会会長）

連絡先　〒780高知市北高見町二八

三二―六九〇二

散歩の途中で



江の口川と支流太田川が合流するところに架かる一文橋は、昭和11年7月に架け換えられたものだが、欄干に一文銭を供していることで有名。昔、橋がなかった頃、対岸へは渡し賃を払って舟で往き来していたが、地域の人々が金を出し合って橋を架けた。そしてその通行料として一文（いちもん）を徴収して架橋工事費の一部にあてた。一文銭はその名残である。

風伯

産学官はいま

米国研究開発の産学官技術移転の国際化調査団に参加する機会に恵まれた。米国の先端技術の開発の効率化、加速化による共同開発、国際間の技術交流、具体的には米国における研究開発や技術移転が大学と共同で様々な形態で進行し、産学官共同が固有のプログラムの下で、研究開発体制のコアとして機能し、同時に研究開発拠点までも産官と一体になって提供する地域開発、地域活性化プログラムが、どのようにして進められているかを見てきた。

規模の違いは初めから予想していたことだが、米国大学の覇権をかけたMIT、ハーバード両大学の産学プログラム、大学主導型としてシリコンバレーの神話を作り上げたスタンフォード大学アーバインや、新たなパークづくりを目指すアリゾナ州立大学をはじめ、地域主導型としてのリサーチトライアングルパーク、産業構造の調整と地域振興を目指すピッツバーグ州立大学、モンゴメリー郡政府によるシャディーグローブ建設にかかる壮大なマスタープランと事業展開などを視察し、今更ながらその構想とスケールの大きさに驚かされ、産学官のあり方についても学ぶことが多かった。

日本でもいろいろやっているが、どだいスケールが違う。高知でも常々言われているように、高知県だけという狭い見地ではなく、期間も一〇〇年ぐらいの長期構想で、資源もなければよそからもってきてでもやるくらいの意気込みで、本気で長期構想をたてて取り組まないと、国際化時代は生き残れないと痛感させられた。

（磐）

高知の都市美100選

高知市内にある、風景や町並みなどで、高知らしい景観を作り上げてきたものを「高知の都市美100選」として選出します。あなたの知っている心なごむ場所を推薦してください。

◎**対象**　高知市内にある風景や町並み、建物などで、高知の都市景観の創出に貢献していると思われるもの。

〈例〉　歴史的に由緒ある場所、美しい町のたたずまい、緑の街路、新しいアメニティの場、水辺、彫刻やモニュメント、住宅やビル、橋など。

◎**推薦方法**　自薦、他薦は問いません。葉書に、推薦物件の名称、所在地、推薦者の住所、氏名、電話番号を記入の上、事業団までお送り下さい。はがき一枚につき何件でも結構です。

◎**締切り**　1月31日(当日の消印有効)

第5回 都市美デザイン賞

「都市美デザイン賞」も併せて募集します。昭和六十三年中に完成した建造物を対象としております。はがき一枚につき一件を、「100選」と同じ要領で推薦してください。

▼**記念品**　「100選」「デザイン賞」の全推選者の中から、抽選により20名に記念品を贈呈します。

▼**応募・問い合わせ**　高知市文化振興事業団まで。

高知を撮る
第5回高知の映像コンテスト

〈**テーマ**〉　高知
記録性を持った古い写真から現代のものまで何でも可。

〈**応募要領**〉
◎応募資格は、撮影者または著作権保持者に限る。
◎作品は4ツ切以上、発泡スチロール貼りとする。組み写真は3枚組までとする。
（ただし、古い写真はこの限りにあらず）
◎既発表作品も可。
◎作品一枚ごとに、裏面に応募票を貼り付けること。

〈**賞**〉特選2点・準特選15点・入選100点（特選・準特選については原版・著作権は主催者に属するものとする。

〈**受付**〉2月1日(水)～28日(火)　郵送の場合28日必着。

〈**入賞作品展**〉　3月中旬

作品募集
くわしくは事業団まで
TEL73－4365

『文化高知』賛助会員募集!!

●会費　年会費2,000円（一括前納・申し込みより一年間有効）
●特典　①「文化高知」の送付（年6回）　②事業団主催事業の入場券や出版物一割引（一部例外あり）　③事業や発行物の案内。
●申し込み　①郵便振替　②現金書留　③事業団へ直接……いずれの方法でも結構です。

あなたのお手元にお届けします。

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8－148869